

都賀大陸著・桂宗信画『絵本三国志』について

On EHON – SANGOKUSHI

金沢大学人間社会環境研究科（博士後期課程3年） 木 越 秀 子

KIGOSHI, Hideko

はじめに

本稿で取り扱う資料は、本紀要第7号の拙稿「都賀大陸著『絵本三国志』序・賛の翻刻および註釈のころみ」でとり扱った資料と同じものである。資料についての詳細は略するが、本学の上田望氏が、江戸時代の『三国演義』受容過程に注目して収集した資料の一つである。

本稿は、氏のご許可を得て、本資料を底本として『絵本三国志』の本文と挿図について論じるものである。

本紀要第7号で上田氏の論文「日本における『三国演義』の受容（前篇）―翻訳と挿図を中心に」（2006年3月、「金沢大学中国語学中国文学教室紀要」）に即し『三国演義』の日本での受容についてのあらましを記しておいたが、元禄のはじめに文山の名で『通俗三国志』が刊行され、これをきっかけとしてその後通俗物軍談ブームが起こったという。そしてこの『通俗三国志』は何度も版を重ねるロングセラーとなったという^{注1}。確かに『通俗三国志』はスケールの大きな国盗り物語であり、登場人物にはそれぞれ個性と魅力があり、作戦を駆使した戦いの場面は血湧き肉おどる痛快さがあり、さらには人物同士の関わり合いもおもしろい。しかしかなりの長編で、読むのに辛抱が必要である。そこでダイジェスト版が生れることとなる。その中で絵を主体とするものの主な刊行は次のようである。

①赤本『三国志』……羽川珍重画。享保6年（1721）刊。水谷不倒著「赤本作者とその書目」（『草双紙と読本の研究』〈水谷不倒著作集第2巻所収中央公論社 1993〉）にその名が見えるが、現在所在不明であるという。

②黒本『通俗三国志』……鳥居清満画。宝暦10年（1760）刊。五十丁。全丁挿図でできていて、図の余白に主として『通俗』から抜萃した文を説明として入れている。内容は劉備玄德が張飛らと拳兵し、漢中王に即位するまでのことを、場面を選んで図にしてある。

③黄表紙『通俗三国志』……画者不明。安永元年（1772）ごろ刊か。董卓の悪逆非道が原因で黄巾の賊が蜂起したことからはじまっており、『絵本三国志』とは構想が違っているとみられ、本稿では取り扱わないこととする。

④都賀大陸著・桂宗信画『絵本三国志』……天明8年（1788）刊。十巻。読本の体裁で、挿図と本文が別になっている。内容は、劉備玄德が漢中王に即位するまでという点では鳥居本と同じであるが、本書は物語の全体がわかるようにダイジェストして作られている。

ところで、文山著『通俗三国志』は『李卓吾先生批評三国志』を底本として訳出されたという。『李

卓吾先生批評三国志』は120回、240章からなり、それぞれに題がつけられている。『通俗三国志』も240章からなり、章題も、ところどころ語句に違いはあるものの、ほぼこれに倣っている。そして都賀大陸著『絵本三国志』は『通俗三国志』の第145章の劉備玄德が蜀の王位に即くまでを抄出しており、章題もほぼこれに倣っている。

さて、『絵本三国志』の本文については、管見によると、元禄4年(1691)に「湖南文山」の名で『通俗三国志』と題して刊行されたものを抄出したもの、という以上に論及したものがほとんどないようである。しかし、おおざっぱに計算しておよそ10分の1に縮めているわけであるが、本稿ではその按配具合を検討し、『絵本三国志』の特徴を示したい。

また、『絵本三国志』は題に「絵本」とあるように、挿図がメインである。『絵本三国志』序によれば、画者桂宗信は中国から渡来した様々な画を参考にしたことが窺える。そのあたりについてはすでに上田望氏が前掲論文でふれており、また、梁蘊嫻氏の「『絵本三国志』の挿絵における合戦場面の「動」と「静」—『三国志演義』宝翰楼本の受容を中心に—」(2009年11月、「鹿島美術研究」年報26号)も備わっている。絵については私は全くの門外漢であり論じることができないが、大陸の父である都賀庭鐘の作品に入られている挿絵との関係など、私の気のついたところを少し指摘しておきたい。

なお本稿では、『絵本三国志』(以下『絵本』とする)の本文と挿図について、主として文山著『通俗三国志』(以下『通俗』とする)、その底本とされる『李卓吾先生批評三国志』(以下「李卓吾本」とする)^{<注2>}、鳥居清満画『通俗三国志』(以下「鳥居本」とする)等との比較により論をすすめることにする。

【1】本文について

(1) 文の抄出について

『絵本』は『通俗』を抄出したものとされているが、まず本文作成の方法のうち、抄出法について検討しておくことにする。

①要約法

例えば、『通俗』の「劉玄德破黄巾賊」(李卓吾本第1回の後章「劉玄德斬寇立功」に当る。以下、「1後」などの形で、章の所在を李卓吾本の当該箇所以示すことにする)の内容は、玄德が挙兵し、官軍に所属して黄巾の賊の討伐に活躍し、曹操とも出会い、敗走する董卓の軍勢を救うも玄徳の身分が低いために軽んじられて恩賞もない、などであるが、これらすべてを要約して大陸の言葉で「賊を大興山に敗り。それより幽州に至り。龔景を扶け。青州潁州廣宗処々の軍に打勝。共に黄巾の賊を滅し。大に戦功あり」とする。

②適語ピックアップ法

『通俗』の章全体から適宜に語をピックアップして粗筋を構成する方法である。これは、ストーリー短縮の常套手段であろう。例えば『通俗』の「廢漢帝董卓弄権」(4前)は、董卓が陳留王を立て権を得て恣にふるまうが、思いあまった司徒王允の志に共鳴した曹操が董卓討伐に向かうというものである。これを『絵本』では、『通俗』の文の全体から適宜語をピックアップして粗筋を作り上げている。

③省略法……『通俗』の大かたは戦闘場面であり、これをほとんど省いている。

例えば『通俗』の「曹操起兵伐董卓」(5前)では、まず鮑忠が先陣の功を狙って先駆けしたことを含め、数人の武将が董卓の武将華雄に挑む場面に結構な紙面を費やしている。この華雄に孫堅をはじめとして数人の武将が挑むが誰も討つことができず、孫堅も討ち負けて敗走する、このとき部下の祖茂が身替わりになって討たれる、そのあと関羽が華雄討伐を志願するが、盟主袁紹が関羽の身分が低いいためその志願を撥ね付ける、それを曹操がとりなし、関羽が華雄討伐に討って出ることになる、このとき曹操が関羽に燗をした酒を酌むが、関羽はそれを飲まずに討って出、それが冷めないうちに華雄の首を取って還る、など、それなりに記憶に残るような戦闘場面やエピソードが立て続けに盛り込まれている。しかし『絵本』ではこれらすべてを「華雄勇をふるふて孫堅を敗るといへども。つるに関羽に斬る」ですましています。

④エピソード選抜法

章中のいくつかのエピソードの内から1つだけを選ぶもので、次に2例挙げておく。

(ア)「祭天地桃園結義」(1前)の場合

『通俗』の本章には次の3つのエピソードがある。

- A、国家の治乱興亡論から始まり、黄巾の賊の興隆のこと。首領張角の話はこれだけで結構面白い。
- B、黄巾の賊を討伐するための兵士募集をきっかけに玄德・張飛・関羽が出会い、義兄弟の契を結ぶこと。今仮にこれを「桃園義結」としておく。
- C、中山の大商人から軍資金を得て武器を作り、若者を集めて挙兵すること。

『絵本』では、Aは省き、Cは次の章にまわし、2つ目のB「桃園義結」のエピソードのみを採り上げている。

(イ)「曹操謀殺董卓」(4後)の場合

①に引いた章の直後の章になるが、『通俗』にはやはり次の3つのエピソードがある。

- A、曹操は董卓討伐に失敗し、偽って董卓から得た馬で本国陳留へと逃げること。
- B、中牟県なかつまの奉行陳宮は董卓の追捕の触れにより曹操を捕えるも、自らも冲天の志あって曹操を解き放ち、ともに陳留へ向かうこと。
- C、曹操は途中旧知の呂伯奢のもとに立ち寄るが、誤解から一家を斬り殺してしまう。陳宮は不当な曹操を殺そうとするも思い直し、曹操のもとを去ること。

『絵本』ではこのうちのAのみを採り上げ、BCは全く省いている。

(2) ストーリー展開について

『絵本』と鳥居本の内容はともに、劉備玄德が張飛らと共に挙兵し、玄德が漢中王に即位するまでである。しかし両者には違いがある。

物語を単に短縮するだけであれば上記抄出法の要約や適語ピックアップの方法だけでも事足りるかもしれない。しかし、刊行して売るといふことであれば面白くなくてはならない。前節④エピソード選抜法はこれに叶う方法であると思われる。面白いエピソードばかりを選択して連続させれば面白いものが出来上がるはずである。

鳥居本はこのエピソード選抜法によって作られている。つまり、読者が喜びそうな場面やよく知っていそうな場面を選んで仕立てているのである。例えば『通俗』の第1章に当る図は3面、そのあと何面か後に王允が貂蟬を用いて董卓を伐つ場面になるが、これに関する挿図は5面、そのあ

と関羽独行まで図がなく、関羽独行には半丁の挿図が6面、といった具合である。すべて面白い場面ばかりで、読者は鳥居本で『三国志』を堪能したことであろう。

しかし、『絵本』は上記の4つの方法を駆使して『通俗』の全体を圧縮しているのであるが、ここで『絵本』が行っている工夫の他の方法も見ておきたい。

『通俗』第1章には劉備玄德について「(父を)^{イトケナク}幼シテ喪ヒシカハ母ニ事^{ツカ}ヘテ孝ヲ尽シ自ラ履ヲ^{ウ ムシロ}售リ蓆ヲ織リテ家業トス」(一部通行の文字に改めた。以下同様)とある。ここには玄徳の属性として貧乏と親孝行の2要素が認められる。物語の主人公が最初は恵まれない境遇にいることは出世物語には重要で、読者に生きる勇気を与えることであろう。

鳥居本の最初の挿図は草履を作る玄徳の背後に彼にいたわりの言葉をかけるやさしい母がいるという場面となっている。この図を最初に置くということは、もしかして玄徳が貧乏だが親孝行であることを読者に印象づけようとしているかもしれない。そうすると鳥居本は、玄徳は貧しいけれど親孝行で、それゆえ最後には漢中王に出世した、という構想を内包するかも知れない。それはともかく、鳥居本は次に「桃園義結」の図を置くが、これは他のエピソードと同列に扱われている。

これに対して『絵本』第1章はどうかというと、前節④エピソード選抜法の(ア)で示した通り、黄巾の賊の反乱等、物語の背景は必要最小限に止め、章の大部分を「桃園義結」の場面のために費やしている。そして、章の終りに「これを桃園に義を結と云」という句を加え、章を結んでいる。この句は『絵本』で初めて使われた語ではない^{注3>}。しかし、この句に本章のすべてが収斂しており、読者にその後のストーリー展開の着眼点を明確に示し、また期待させるのに効果的なようである。挿図もまた「桃園義結」の場面であり、桃の木以外はすべて省き、玄徳・張飛・関羽の3人の誓いの瞬間をクローズアップしている。勿論画面に貧乏と親孝行のことは全く表現されていない。

ストーリー展開を明確にするために工夫していることをもう少しあげておこう。

その1つは、前節④(ア)で既に述べたが、『通俗』の第1章の3つのエピソードの内、3番目の玄徳らの挙兵のエピソードを、『絵本』では第2章として独立させていることである。そして、本来の内容は50字余りに要約して付け足しのような扱いにしている。

玄徳らが挙兵しなければ物語が始まらないわけで、挙兵は本物語展開の重要な動機である。このエピソードのために章を別に設けたことはやはり大陸の工夫と言ってよいだろう。

このような方法は「虎牢関三戦呂布」(5後。後述)にも用いられている。

もう1つの工夫は、曹操・孫堅の登場を『通俗』より遅らせている、ということである。

曹操の登場は『通俗』では「劉玄德破黄巾賊」(1後)で、ここで人物紹介があるのに、『絵本』では「何進謀殺十常侍」(2後)で登場させ人物紹介を行っている。また孫堅は『通俗』では「安喜県張飛鞭督郵」(2前)で登場するが、『絵本』では「曹操起兵伐董卓」(5前)まで登場させず、人物紹介がないままである。重要人物の登場の機会をしばることでストーリーの無駄を省こうとしているが、このことは結果的にはストーリーの展開を明確にしているようである。

(3) 訂正などについて——「祭天地桃園結義」(1前)を例として

『通俗三国志』の訳文が逐語訳でなく、また正確さを欠いているらしいが、その理由について徳田武氏をはじめ、長尾直茂氏、上田望氏等が論じている。このあたりを『絵本』はどう処理してい

るか、「祭天地桃園結義」（1前）を例として見ておくことにする。次の表は本章について、李卓吾本・『通俗』・『絵本』三者の相違点をピックアップしたものであるが、これについて考察すれば全豹を推し量ることができるのではないだろうか。

	李卓吾評三国志演義	通俗三国志	絵本三国志
①	玄德甚喜留飲酒間見一大漢。	伴ツテ玄德ノ家ニ来リ酒ヲ飲テ相議スル所ニ又一人ノ男来リ（一部ルビを省略。以下同様）	玄德を伴ひて家にかへり。留て酒を飲むの間。又一人の大漢来り。
②	四方百姓裹黃巾従張角反者。四五十万。	四方ノ愚民ワレモヘト来リ集リ皆黄ナル絹ヲ以テ其頭ヲ包ケレハ世ノ人コレヲ黄巾ノ賊ト号ス	鉅鹿郡に張角といふ者謀叛し。賊徒悉く黄絹にて頭をつゝむ。是を黄巾の賊と云。
③	出榜	高榜ヲ立テ	高榜を出シ
④	好交遊天下豪傑	天下ノ名アル人ヲ友トシテ	賢人を友とし
⑤	両耳垂肩。雙手過膝。目能自顧其耳。	両ノ耳肩ニ垂左右ノ手膝ヲ過ヨク目ヲ以テ其耳ヲ顧ル	耳は肩に垂。目を以てよく其耳を顧る。左右の手膝を過ぐ
⑥	豹頭環眼燕頤虎鬚面如重棗。唇若抹珠。	豹頭、環眼、燕頤、虎鬚、面ハ重棗ノ如ク唇ハ抹珠ノ如シ	豹頭、環眼、燕頤、虎鬚、面棗を重るが如く。唇珠を抹がごとし。
⑦	本処豪霸倚勢欺人関某殺之逃難江湖	郷ノ豪雄勢ヒニ依テ我ヲ侮リシユエ我之ヲ殺シテ江湖ノ間ニ逃レ	郷の豪霸勢ひに依て人を欺あり。我是を殺して江湖の間にのがる。
⑧	招募義士	英雄ノ士ヲ招ク	義士を招く
⑨	三人大喜	関羽天ノ助ナリト喜ヒ	三人大に喜び
⑩	誓畢	祭リ了リテ	誓おはりて
⑪	天人共戮	天人共ニ誅戮スベシ	天人ともに戮せよ
⑫	聚郷中英雄	郷ノ内ニテ腕立スル若者共ヲ集メ	郷中の英雄をあつむ

〔上記の表についての考察（①②等の数は表の番号に対応する）〕

①李卓吾本の「玄德甚喜留飲酒間見一大漢」は玄德と張飛が意気投合して酒を酌み合っているところへ関羽がやってきたことを示す。が、その場所について『通俗』は「玄德ノ家ニ来リ」とし、『絵本』は「玄德を伴ひて家にかへり」とする。『通俗』は玄德の家、『絵本』は張飛の家ということになる。が、一体どちらなのだろうか。また、李卓吾本はそのあと「推一輜小車。到店外歇下車子。入來飲酒……」と続ける。この「店」はどこにあるのであろうか。

李卓吾本からはどちらとも判断できない。しかし『通俗』の「玄德ノ家ニ来リ」というのでは、玄德の家が酒店のすぐ前にでもない関羽と会うのはなかなか難しいことになる。ところで張飛は「酒を売り、猪をほふりて業とす」る人物である。『絵本』はこれを踏まえ、張飛が自分の家に連れていったことにしてつじつまを合わせたようである。少なくとも『絵本』ではストーリーの綻びが繕えている。因みに毛宗崗本（以下「毛本」とする）では「玄德甚喜、遂與同入村店中飲酒。正飲間」と、玄德と張飛が村に入り、そこの酒店で関羽と出会うことになっている。

②『通俗』の「コレヲ黄巾ノ賊ト号ス」は李卓吾本にはなく、『絵本』は『通俗』を採り入れて「是を黄巾の賊と云」とする。

③『通俗』は「(高^{フタ}榜ヲ) 立テ」とするが、『絵本』は「(高^{かけふだ}榜を) 出シ」とする。これは原典の李卓吾本の表記「出(榜)」を採用したものと見られる。『絵本』では原典の表記を採用する傾向があり、①⑦⑧⑩⑪⑫にも見られる。

④李卓吾本は玄德の友を「豪傑」とする。これを『通俗』は「名アル人」とする。有名人の意ととれる。『絵本』では「賢人」の訳語を当てる。(因みに、⑦の項で考察する通り、『絵本』では関羽が殺した相手である「豪覇」に「なあるもの」の読みを付している。)

「豪傑」について「日本国語大辞典」は「才智または武勇の、ひじょうにすぐれているさま。また、その人。」とする。しかし、例えば『童子問』(伊藤仁斎著、宝永4年〈1707〉刊)には「豪傑なる者は少ふして、庸材(平凡な才能の人)なる者は多し」とある。また、『康熙字典』(大陸の父庭鐘が翻刻校刊している)の「傑」に「淮南子泰族訓 智過^ル万人者謂^フ之英。千人者謂^フ之俊。百人者謂^フ之豪。十人者謂^フ之傑」と注する。どちらかという、勇より智の面が強調された解釈となっている。『絵本』ではこの解釈を踏まえて「賢人」の訳語を当てたと考えられる。また、物語の中で繰り返し玄德を徳ある人物とするが、「賢人を友とし」とすることでそれを表わそうとしたのかもしれない。

⑤玄德の身体の特徴を描写した部分であるが、李卓吾本・『通俗』は「耳→手→目」の順に叙述する。これに対して『絵本』は「耳→目→手」の順に述べる。「目を以てよく其耳を顧る」というのであるから、耳の次には目にいき、そのあと手にうつる『絵本』の叙述がより合理的であろう。大陸は原典でも不適切なことがあれば訂正しようと考えている節が窺える。

⑥前半は張飛、後半は関羽の容貌を表現した部分であるが、『通俗』が「豹頭、環眼、燕頤、虎鬚、重棗、抹硃」に「ヘウトウ、クワンガン、エンガン、(コ) シュ、チヨウサウ、マツシュ」の読みを振るのに対し、『絵本』は「へうのかしら、まるきまなこ、つばめのおとがひ、とらのひげ」とし、また「おもてなつめをならぶるがごとく、くちびるしゆをぬるがごとし」としている。これは振り仮名で語意を伝えようとしているのではないかと考えられる。例えば「何進謀殺十常侍」(2後)に「滋蔓」とあるのを『通俗』は「ジマン」の読み、『絵本』は「はびこれり」の読みを振っている。

⑦李卓吾本によると、関羽は玄德・張飛に、故郷で「豪覇」が勢により「欺人」のでこれを殺して江湖へ逃げてきた、と告げる。

(ア) 李卓吾本の「豪覇」を『通俗』は「豪雄」とする。「豪雄」を、諸橋徹次の「大漢和辞典」は「すぐれて勇ましい人」とする。この意だとすると、関羽がすぐれて勇ましい人を殺したことになり、関羽の人物像に合わないようである。

『絵本』は「豪覇^{なあるもの}」とする。李卓吾本の「豪覇」をそのままにし、「なあるもの」の読みを付す。これはどのような意を表そうとしたのであろうか。

「大漢和辞典」に「豪覇」の立項はないが、「豪」には「ひいでる・つよい」などの語釈、「覇」には「はたがしら・かしら」などの語釈を施して「特に文徳を主とせず、武徳を主とするものをいふ」と意を補う。「故郷の有力者」くらいの意のようである。これから推して、『絵本』が「豪覇^{なあるもの}」としたのは、「なあるもの」だけでは十分に意を尽くせないと考え、「豪覇」の文字を残したと思われる。因みに、毛本は「本処勢豪」とする。「勢豪」は「勢力ある豪家・富豪」の意のようである。

(イ) 「欺人」の「人」を、『通俗』は関羽として「我ヲ侮リシユエ」と訳し、『絵本』は関羽以外の人として「人を欺あり」とする。そうすると、『通俗』は関羽が自分を侮る「豪雄」を殺したこと

になるが、『絵本』では関羽以外の人物が「豪覇」に欺かれたのでこれを殺した、ということになる。

李卓吾本は「関某殺之逃難江湖」と続くが、「関某」は関羽であり、「欺人」の「人」は関羽とは別の人物であるはずである。やはり、義の人関羽は自分のためには人を殺したりしない。文山は誤訳をしたらしく、大陸はこれを訂正している。

⑨『通俗』の訳「関羽天ノ助ナリト喜ヒ」は毛本の「雲長大喜」に依っているかも知れない。

以上から、大陸は『絵本』作成にあたり、『通俗』に従いながらも誤訳とみられる部分については原典にたちもどって間違いを正そうとしている。また、原典の用語を尊重する姿勢が見られる。そして、時には原典の不合理も合理化し、わかりやすくしようとしていることが窺える。

(4) その他

ここで、もう少し大陸の努力の例をあげておこう。

①「虎牢関三戦呂布」(5後)

この章の題を『絵本』はそのままにするが、『通俗』は「呂布大戦虎牢関」と少し変えている。なぜだろうか。

李卓吾本は語り物の形式を残している。つまり、登場人物危うしというようなところで話を切り、「○○如何(此人是誰)。且聴下回分解」とすることが多い。「○○危うし、この先いかがになりますか、次回をお楽しみに」というわけである。しかし『通俗』は読み物なのでその必要がなく、一話完結の形にする。そのため李卓吾本と区切りが異なっていることが多い。この章では李卓吾本・『通俗』・『絵本』3本で章の区切りが異なっている。

次は本話のエピソードの区切り目を―――で示したものである。

- | |
|--|
| <p>—————李卓吾本—————</p> <p>A、董卓の将華雄を関羽が倒す。</p> <p>—————『通俗』—————</p> <p>B、危機を感じた董卓は李傕らに汜水関を守らせ、自らは虎牢関を守り、呂布には虎牢関の外に陣取らせる。</p> <p>—————『絵本』—————</p> <p>C、袁紹を盟主とする董卓討伐連合軍は、太守張揚の将穆順、太守孔融の将武安国ら八ヶ国の諸侯が呂布を攻めるが形勢は不利である。</p> <p>D、そんな中、まず張飛が呂布に討ってかかり、続いて関羽、その後玄德が参戦し、ついに呂布はたまらず敗走する。張飛が追撃するも虎牢関城壁からの投石で果たせない。「此ヲ世ニ伝ヘテ虎牢関ノ三戦ト云フ(『通俗』)」(『絵本』は「是を虎牢関の三戦といふ」。李卓吾本には見えない。)</p> |
|--|

Dの部分が「虎牢関の三戦」に当るはずであるが、『通俗』ではDの部分が章の4分の1しかなく、どの戦いが「三戦」なのか今一つ不明瞭で、「虎牢関三戦呂布」の題が似合わない。そのため「呂布大戦虎牢関」と題を変えたのではないかと考えられる。しかし、もしかして日本の「三国志演義」

愛好者の間では「虎牢関の三戦」と言えば話が通じるくらいに有名な場面だとすれば、「虎牢関三戦」の語を省くわけにはいかず、本章の末尾に原典にはない「此ヲ世ニ伝ヘテ虎牢関ノ三戦ト云フ」という一句を入れたのではないか、と思われる。が、やはり有名な場面の章であれば「虎牢関三戦呂布」の題はそのままだにしたいところであろう。『絵本』はそのためにBも前章へ繰り上げ、本章はCDのみとしている。そのため短い章になってはいるが、D部分が3分の2を占めるようになっている。大陸は「虎牢関三戦呂布」の内容を章題にふさわしくしようと努力した、と言える。

第一章の手当もこれに類するもので、区切り目を改変することで一話のエピソードを明確化しようとしているようである。

②「甘寧百騎襲曹操」(68前)(李卓吾本「甘寧百騎劫曹營」)の「抜開鹿角」のこと

この章の李卓吾本に「抜開鹿角」とあるのを『通俗』は「鹿垣を打破て」とし『絵本』は「鹿角を抜き開き」としている。

『太平記』に「鹿垣・逆木引破テ」〔巻七 新田義貞賜諭旨事〕、「己ガ結タル鹿垣切テ押破リ」〔巻三十二 直冬上洛事〕などとある。『通俗』はこれに倣って「破テ」と訳したと思われる。しかし、正徳2年(1712)に『和漢三才図会』が刊行されている。その「鹿角木」の解説は「三才図会云鹿角木^{ハンテ}折^ユ堅木^{ナル}如^ノ鹿角形^ノ者^ノ断^ユ之^ニ長数尺^ニ埋^ニ入地^ニ深尺余^ニ以^テ関^{サヘシハ}馬足^ヲ城外^{アマネク}遍植^ス之^ヲとする。」「深尺余」を地に埋めこんで作るようで、「打破て」より「抜き開き」とする方が適切であろう。大陸は『和漢三才図会』を目にすることができたはずで、先の数々の例も合せ考えると、『通俗』を抄出するに当り、新しい、または正しい知識をとりこもうと努力したようである^{<注4>}。

【一】挿図について

『絵本三国志』の挿図は各章に2葉以上付され、全部で149葉ある。この挿図について上田望氏は「日本における『三国演義』の受容(前篇)―翻訳と挿図を中心に」(前掲)で「中国の挿絵本に量的にも質的にも対抗できる本格的な挿図本の登場と言えるであろう」と評価している。そして、『絵本三国志』の挿図作者桂宗信が「遺香堂本の挿図を参照していたことはほぼ疑いを容れない。ただ、「曹操定陶破呂布」の絵でもそうであるように宗信が自分の想像力を発揮して描いた部分も少なくなく、遺香堂本にある珍しい絵をあえて取り上げなかったケースもある」と述べる。

その後実際に調査した結果をまとめたものとして、梁蘊嫻氏の「『絵本三国志』の挿絵における合戦場面の「動」と「静」―『三国志演義』宝翰楼本の受容を中心に―」(前掲)がある。

梁蘊嫻氏によれば、「『絵本三国志』の挿絵は六種の『三国志演義』刊本を参照しつつも、その全体像は諸本の挿絵とは異なった風貌を呈している。すなわち、『絵本三国志』は摸倣にとどまらずに、自らの特色を出しているのである。ところが、摸倣によって生み出された作品の独自性については、先行研究では具体的に論じられていない」とする。そして『三国志演義』の六種の刊本をあげている。即ち、周曰稿本(1591刊)・呉観明本(1621～1627頃刊)・英雄譜本(1628～1644頃刊)・遺香堂本(1632刊)・宝翰楼本(明末清初刊)・李笠翁本(1680刊)である。氏はそれぞれについて『絵本三国志』が参考にした図の葉数を数え、宝翰楼本が27図と最も多い、という結果を得、これと『絵本三国志』の比較を行っている。

筆者は中国の刊本については全く無知であり、梁蘊嫻氏の挙げる6種のうち、中国古典文学挿画集成『三国志演義』(瀧本弘之編、遊子館、1998年刊)収録の周曰稿本・呉観明本(図は注2に掲げた「対訳中国歴史小説選」〈徳田武編、ゆまに書房〉掲載と同じもの。これまで「李卓吾本」と

してきたが、以下、都合により挿図については「呉観明本」とする)、また鳥居本くらいしか見ることができない。その中で気づいた具体例を記すことで『絵本三国志』の挿図の特徴を示しておきたい。(以下、都合により図は後ろにまとめて掲載するので、そちらを参照されたい。)

(1) 挿図作成法の具体例

図①「祭天地桃園結義」(1前)(各書の本巻の挿図、また、人物の顔を掲げておいた。)

○三本を比較すると、周曰稿本・呉観明本は牛馬を殺して天を祭る部分を描き込んでいるが、『絵本三国志』は桃の木と玄德・張飛・関羽しか描いていないことがわかる。

○人物の顔等についてであるが、『絵本』の玄德の耳はやや大きめに描かれている。かぶり物は鳥居本の関羽のものを借用しているようである。

張飛の虎鬚はやはり鳥居本とよく似ている(図②鳥居本参照)。「環眼」については、どの書も大きく描いているが、周曰稿本では時には滑稽なくらい円く描かれており、それに比べれば『絵本』はこの目で張飛の粗暴で威圧的な性格を表わそうとしているように見える。このあたりは、宗信が本文に添った挿図を心掛けていたことがうかがわれる。

関羽の髯の長さは周曰稿本・呉観明本ともに玄德と大差がないが、『絵本』は腹を過ぎている。関羽の身長は9尺5寸、髯は1尺8寸なので、髯は身長5分の1弱であり、『絵本』のは長すぎるようである。ただし、「関羽白馬刺顔良」(25後)で「美髯公」の称を得、その時は「過于其腹」である。すでに商売の神として伝わる関羽像はたいがい長い髯を持っているようで^{<注5>}、読者もそれでないと納得しなかったかもしれない。

○ここでもう一つ気になる点は、『絵本』の関羽が横向きに描かれていることである。その理由は、関羽の顔について「重棗」という語が用いられているが、それがどんな様子をあらわすかよくわからず^{<注6>}、横向きに描いて、あとは読者の想像に任そうとしたのではないか、と思われる。

図②「安喜県張飛鞭督郵」(2前)

張飛が督郵を鞭打つ図であるが、呉観明本は張飛が正面から督郵の襟元を掴み、鞭を振り上げている図となっている。これに対し他の3本は張飛が督郵の髻をひつつかんでいる。督郵が杭に縛り付けられている図をいくつか目にしたが、これらから考えると『絵本』は周曰稿本にかなり近いようである。

図③「董卓議立陳留王」(4前)

『通俗』は題を「董卓起兵入洛陽」と改変し、『絵本』もこれに倣っている。

そして挿図が、『絵本』と周曰稿本・呉観明本(図は省略)とでは、全く異なっている。その理由は次のように考えられる。

この章で、董卓はどさくさに紛れて帝を手中におさめ、入洛する。そして、何進にとってかわって権力を握り、ここから物語は董卓の横暴へと転換していく。その章題が「董卓議立陳留王」ではそれが明確に伝わらない。そこで、この章にふさわしい題として「董卓起兵入洛陽」が撰定されたのではないだろうか。そして挿図もこの章題にふさわしく改められたと考えられる。

図④「曹操謀殺董卓」(4後)

曹操が董卓を謀殺するために宝剣をささげている図である。『絵本』と呉観明本の曹操の姿勢が殆ど同じである。しかし董卓については『絵本』本文に「卓本より胖大。久しく坐する事あたはず。身を横にし背向て臥す。曹操是よき時分とおもひ宝刀をぬく。其影床上の鏡にうつる。卓見て急に起上り」とあり、呉観明本の董卓の図はこれに合わない。遺香堂本では董卓は肥えて床上に横たわ

る図で、これを参考にしたようである。

そしてここでは鏡が大切な小道具となっているが、『絵本』ではこの鏡の位置とサイズに工夫を加えているようである。李卓吾本本文は「卓仰而看衣鏡中見操挟刀靶」とあり、特に鏡の位置については不明であるが、呉観明本挿図では董卓の左側の卓上にある。この小さい鏡で、この位置で、董卓は曹操の行動を把握できるだろうか。これに対し、『絵本』の挿図は上記本文に添い、鏡の位置を董卓の枕元近くにし、サイズも大きくしている。これなら董卓が曹操の不審な行動を察知できるであろう。勿論大陸が合理的な叙述を心掛けたことであろうが、宗信も本文にそって合理的な挿図を制作しようと志向していたことが窺える。

図⑤「董卓火焼長楽宮」(6前)

呉観明本の下方円内に見える屋根の形は尖った方形で、頂上に飾りがついている。上方円内の建物の屋根は棟が十字になっている。この二つの建物が『絵本』では円内にまとめられていることがわかる。

他にも呉観明本と似た図を目にしたが、上方円内の屋根が入母屋造りになっており、このような十字の棟をしているのは管見の範囲ではこれだけであった。

以上から、上田氏、梁蘊嫻氏の指摘の通り、挿図作者桂宗信は、中国渡来の図画を参考にし、更に鳥居清満の『通俗三国志』も参照しながら、これに独自の工夫を加えて『絵本三国志』の挿図を制作したことがわかる。その根底にあるのは、物語に沿った挿図を制作したいという願いだったであろう。『絵本三国志』の序にもそれが窺える(本紀要7号拙稿参照)。

中村幸彦氏は「上田秋成伝浅説」(「中村幸彦著述集」巻12所収、中央公論社刊『歴史と人物』27号〈1973〉掲載のものに補記)で、大阪の好事家で作る混沌会の文学散歩に参加して、都賀庭鐘筆の墓碑銘のある桂宗信の墓を見つけた喜びを語ったあと、一流の絵師であったはずの宗信の墓碑銘に「画工」という文字を刻んだ意味を考察し、これは宗信の意志によるものではないかと考え、「宗信は又一个の個性的な、庭鐘や秋成と共鳴しそうな人物となってくる」と述べている。今はほんの一部しか紹介できなかったが、宗信は物語の内容をよく知った上で挿図を作成したことは確かである。

(2)『絵本三国志』と『繁野話』の挿図の作者こと

図⑥は呉観明本の「戦徐塘呉魏交兵」(108前)と都賀庭鐘作『繁野話』(読本、5巻6冊、明和3年(1766)刊)の第一話の挿図である。『繁野話』の右ページの建物の図が先掲図⑤の呉観明本のものに似ているようである。『繁野話』の建物の周囲を包むのは雲気であり、『絵本』・呉観明本のは炎であり、また建物の形もかなり異なっているの、似ていると思うのは気のせいであろうか。

ここで更に『繁野話』の左ページの遠景に注目すると、水際・山の稜線等の形が⑥図の呉観明本のものに似ているようである。これも気のせいであろうか。

ところで、この呉観明本の小円内に船らしきものが見える。『繁野話』の同じような位置の半円で囲んだ部分に注目すると、尖ったものが見えるが、これは船の帆柱である。

実は、図⑦の『絵本』(「孫堅跨江戦劉表」〈7後〉)の挿図にも呉観明本・『繁野話』と同じような遠景が左上に配置されており、同じ位置に帆柱が何本か描かれているのが見える。これはもう偶然の一致とは言えないのではないだろうか。

『繁野話』は岩波書店刊の「新日本古典文学大系」に納められ、その解説で徳田武氏は「挿絵は、

画風から推して桂眉仙（宗信のこと（＝筆者注））か」と述べている。

『繁野話』には中国の物語がなく、従って三国志演義に関する図は先述のただ一例だけであるが、この『繁野話』と『絵本三国志』の挿図の類似は、『繁野話』の画者が桂宗信であるとするに十分な材料になるのではないだろうか。そして、先の検討考察から、桂宗信は呉観明本の挿図に倣って『繁野話』の挿図を作り、そのモチーフを『絵本三国志』に採り入れたと言ってよいのではないだろうか。

そして、たった一例であるが、この類似は『絵本』の挿図制作のために中国渡来の挿図を見ることは、『繁野話』刊行のところに既に始まっていた証しとしてよさそうである。そしてもしそうなら、『絵本三国志』の制作企画は鳥居本成立5～6年後に既に立てられたことになる。

さて、『絵本三国志』は天明8年（1788）に刊行されたが、『繁野話』は明和3年（1766）で、ほぼ20年前に当る。ここで思い出されるのが『絵本三国志』の大陸の序である。序には、『絵本』を企画し、宗信に絵を頼んだところ、「自来闊^{スルコト} ^フ年^{ント} 幾^{トシテ} 二十。査^ヲ 乎^ヲ 不^レ 見^ヲ 其^ヲ 人^ヲ。」とある。挿図の制作を任せて以来20年ほど「其人」を見なかった、というのである。20年ほど行方がわからなかったというのはどうかと思うが、『絵本三国志』の挿図制作には20余年を要したのは本当らしく、『絵本三国志』序は本当のことを述べている、ということになりそうである^{<注7>}。

（3）『絵本三国志』と『呉服文織時代三国志』の挿図の作者こと

さて、『絵本三国志』刊行の7年ほど以前の安永10年（1781）に『呉服文織時代三国志』（浄瑠璃、5巻6冊。以下、『呉服』とする）が刊行された。本書の作者は内題下に「毛野村丹三郎」とあるが、これが都賀庭鐘のことであることは浜田啓介氏の詳しい考察^{<注8>}以来定説となっている。この作品は「江戸怪異綺想文芸大系」2に納められているが、解題（木越治）には「画者不明」となっている。しかし、この画者も桂宗信として間違いがない。

本書の挿図の各部分には呉観明本や『絵本』のものとよく似たモチーフがそこそこに見出されるが、本稿はこのことについて考察する紙面がもうないので、次に一例のみあげてその証しとしたい。

図⑦は「鳳儀亭布戯貂蟬」（8後）（『通俗』『絵本』『鳳儀亭呂布戯貂蟬』）の呉観明本・『絵本』・『呉服』各書の、呂布と貂蟬がこっそりデートしている場面の挿図である。

呉観明本と『呉服』を比較すると、呂布と貂蟬の立ち姿が似ており、左側に董卓がいる構図も似ている。周曰稿本では董卓は右に描かれているので、このことから『呉服』の挿図は呉観明本を参考にしていると考えるのが順当のようである。

次に『呉服』と『絵本』を比較すると、『絵本』の左ページは省いたが、『絵本』では董卓を削除し、貂蟬と呂布のデートの瞬間にのみ焦点をしばった図となっている。この点は大きく異なるが、二人とその間に描かれている建物の柱との位置関係が呉観明本より『呉服』との類似度が高く、少し位置は違うが、二人の右に階が描かれている点も考慮に入れると、『呉服』の挿図は『絵本』にかなり近いと言える。

このことから、『呉服文織時代三国志』の画の作者は桂宗信であり、また、少なくとも『絵本三国志』の「鳳儀亭布戯貂蟬」の挿図は、『呉服文織時代三国志』が刊行された時点、つまり『絵本三国志』成立の8年前に既に試作されていた、と言っていいようである。

そして『絵本』の挿図はその後、董卓を省いたり、植木を呉観明本に見える芭蕉のようなものにしたりして手を加え、制作されたことが窺える。

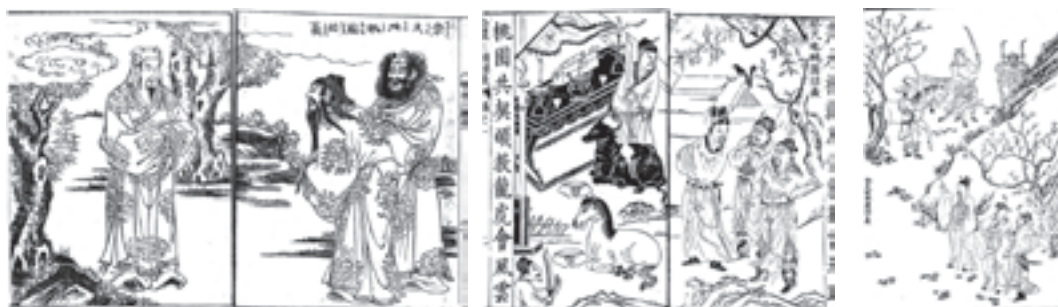
『絵本三国志』と『繁野話』、『呉服文織時代三国志』の挿図の類似性から見て、『絵本三国志』の挿図制作の過程は、その序で大陸が述べる通りであった、と言ってよいようである。つまり、桂宗信は、中国渡来の三国志演義関係の諸書に加え鳥居清満の『通俗三国志』など日本のものも参考にし、本文に添った図を作成しようと努めた。そして、そのための研究期間も入れると、完成までに20余年の歳月をかけたと言ってよいようである。

絵については全く素人である私であるが、各書の挿図がいろいろなものを描き込み説明的であるのに対し、『絵本三国志』の各挿図は瞬間を捉えたものとなっており、その前後に流れる時間を想像させる力のある一幅の絵として完成度の高いもののように見える。先に上田望氏の「中国の挿絵本に量的にも質的にも対抗できる本格的な挿図本の登場と言えるであろう」の評言を掲げたが、『絵本三国志』はもっと評価されてもよいのではないだろうか。

<注>

- 1、『通俗三国志』の表記は漢字片仮名まじりで句読点はなく、濁音符も少なく、平仮字に慣れた人々には読みにくいものだったと考えられる。やがてこの『通俗三国志』は、天保7年～12年にかけて池田東籬が表記を漢字平仮名混じりにし、葛飾戴斗の手になる多量の挿絵を入れた体裁にし、『絵本通俗三国志』として刊行された。これは今も現代仮名遣いで活字化されたものが刊行されている。『通俗三国志』の本文が刊行以来ずっとそのままの形で読まれ続けていたことがうかがわれる。
- 2、都合により蓬左文庫所蔵本の影印である「対訳中国歴史小説選」（徳田武編、ゆまに書房、1984年刊）を用いた。
- 3、「桃園に義を結」という句はすでに寛保3年（1743）初演の歌舞伎「久米仙人吉野桜」に見られる。
- 4、この章では『通俗』は「殺」を訳出していないのを、『絵本』は「きりて」と訳出している。また、李卓吾本の「不折」を『通俗』は「薄手をだにも被らず」とするが、『絵本』では「（一人も）損ぜず」としている。こちらの方が妥当であろう。
- 5、長尾直茂「江戸時代の絵画における関羽像の確立」（『漢文學解釋與研究』第二輯（1999年11月）所収）参照。
- 6、小川環樹訳「三国志」〈岩波文庫、1953年刊〉では「重棗」を「熟した棗」と訳し、これに次のような注を付けている。
「原文『重棗』。魯迅の雑文に『^{ちようそう}重棗とはどんな棗であるか、わたくしは知らない。要するに赤い色には違いあるまい』（且介亭雑文、一九三七年刊「臉譜憶測」）とあるように、熟した^{なつめ}なつめのように赤い色と云う以上のことは分らない」
- 7、そうすると、先の本紀要第7号の拙稿「都賀大陸著『絵本三国志』序・賛の翻刻および註釈のこころみ」で、「熟々見^{ルニ}。彼^レ所^レ設^ル図也。（熟々^{つらつら}彼が図を設る所を見るに）」の「彼」の注釈を、「これまでに刊行されたもので、たとえば鳥居清満の『通俗三国志』を指すか。」としたが、この「彼」は李卓吾評『三国志演義』等、中国の「三国志演義」の諸本をさすと考えるべきと思い込んでいる。この場を借りて前稿を訂正させていただくことにする。
- 8、『呉服文織時代三国志』について」（1970年4月、「国語国文」39-4）

図① 「祭天地桃園結義」(1 前)



『絵本三国志』

周日稿本

呉観明本



『絵本三国志』より



鳥居本・関羽



周日稿本

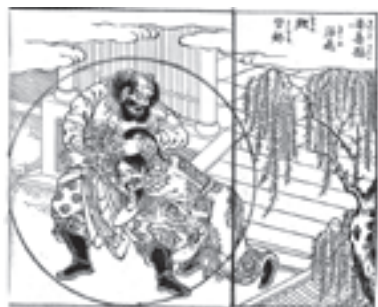
図② 「安喜県張飛鞭督郵」(2 前)



鳥居本



呉観明本

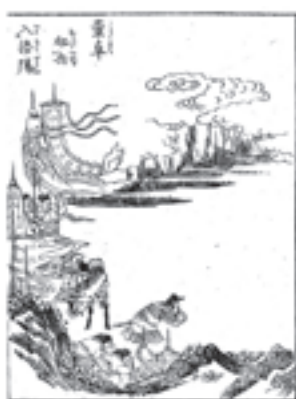


『絵本三国志』



周日稿本

図③ 「董卓議立陳留王」(4 前)



『絵本三国志』



呉観明本

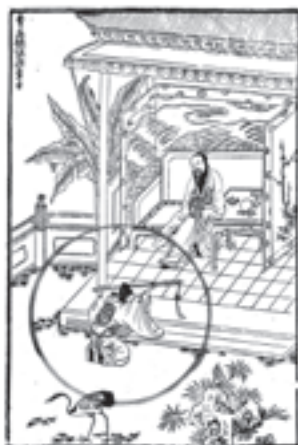
図④ 「曹操謀殺董卓」(4 後)



『絵本三国志』

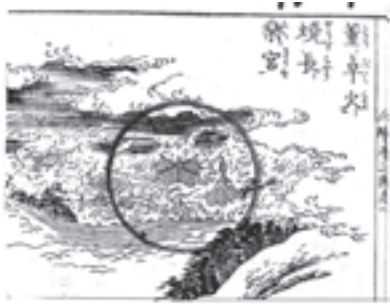


周日稿本



呉観明本

図⑤ 「董卓火焼長楽宮」(6前)

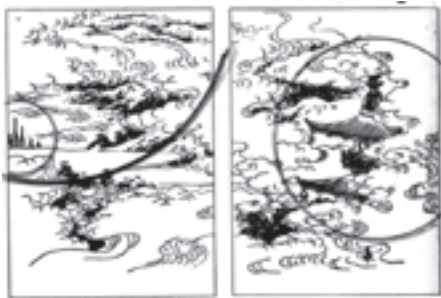


『絵本三国志』

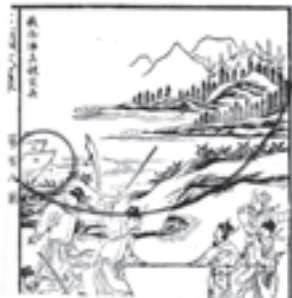


呉観明本

図⑥

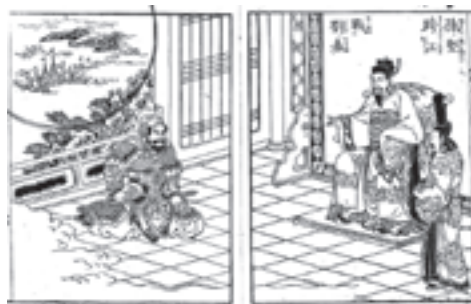


繁野話



呉観明本

図⑦



『絵本三国志』

図⑧



呉観明本



『呉服文織時代三国志』



『絵本三国志』